



◇第11回生物工学産学技術研究会 報告◇

産学連携委員会

第11回生物工学産学技術研究会を5月23日(水)に東京大学中島董一郎記念ホールにて開催いたしました。本研究会は「ものづくり」の現場を大学の若手研究者に伝えるという趣旨に基づいた企画となっていますが、今回は「元気な日本のバイオベンチャー」4社から、会社の概要や製品についてご紹介いただきました。今回は、連日学会行事が続いたことや就職活動の時期と重なるなど不都合な条件にもかかわらず、学生26名を含む、合計75名の方々のご参加いただきました。

研究会の冒頭、木野邦器会長より産学連携ならびに本企画の意義を含めご挨拶いただき、引き続き会社を代表する4名の講師の方から約50分間ご講演をいただきました。会社の立ち上げの経緯からその後の苦労話を含め、現在の主な活動を熱く語っていただきました。講演後の休憩時間を交流の場とし、身近な質疑の機会を設けました。

終了後、懇親会会場にて、川面克行副会長より一連の講演の総括を含めてご挨拶をいただきました。

◆「生命の根源物質5-アミノレブリン酸」 (SBIファーマ株式会社、代表取締役執行役員副社長) 田中 徹

5-アミノレブリン酸(ALA)の開発の経緯から、その機能性や生理的作用の詳細を御講演いただきました。ALAはヘムの前駆体でミトコンドリア機能を活性化し、老化防止、肌の保湿、糖尿病改善などに効果があることや、がん細胞中で蛍光を示す物質PPIXを蓄積するため医療現場で有用であることが示されたほか、バーレーン政府からも支援を得ていること、開発に関しては平成19(2007)年に生物工学会の技術賞を受賞されていたことなどが紹介されました。大きな親会社と小さいベンチャーの比較に関しても貴重なご意見をいただきました。



◆「個人向け腸内細菌叢解析事業について」 (株式会社サイキンソー、代表取締役) 沢井 悠

個人向け腸内細菌叢解析サービス、マイキンソーを中心として、医療現場との連携活動として行われているコホート研究などをご講演いただきました。腸内細菌叢は免疫活性に影響を及ぼしていることが明らかとなってきたので、将来は個人の菌叢解析データを医療現場につなぎ、生活のアドバイスを健康維持を図ることを目標とされています。また起業したビジネスを成功に結びつけるためには、研究環境や人脈を整えることが重要であることなど、有用なご意見をお聞きすることができました。



◆「メタボローム解析によるバイオマーカー開発のシーズ探索」 (ヒューマン・メタボローム・テクノロジーズ株式会社、取締役研究本部長) 大橋 由明

創業15年となり、第9回日本バイオベンチャー大賞を受賞された会社のこれまでの経緯やメタボローム解析の歴史、主要ビジネスとなったバイオマーカー探索事業について御講演いただきました。腫瘍マーカーの同定は診断薬の開発につながり将来性が囑望されていること、オランダのライデン市に研究所を設立し海外展開を進めていることや、博士号を持つ6名が起業し、現在は60名近くの従業員を抱えるベンチャーに成長した軌跡など、貴重なお話をご紹介いただきました。



◆「この10数年のバイオベンチャー業界の動向とちとせグループの歩み」 (株式会社ちとせ研究所、代表取締役CEO) 藤田 朋宏

社名変更の経緯から企業理念をご紹介いただき、現在広く手がけている事業についてご講演いただきました。15年ほど前に不均衡進化論を利用した育種技術から事業を始め、現在は千年後に残る技術の開発を目指し、国外出身者を含め約90名の従業員とともに藻培養からイチゴの栽培まで、幅広くビジネス展開をされていること、ベンチャーならではの苦労話や資金調達に関するご意見など、普段は聞けないようなお話をご紹介いただきました。



バイオベンチャーの立ち上げには、まず社会的信用を得ることが重要であることや資金調達の苦労などがあるため、安易にお勧めしないと話しされた演者が半数居られ、ベンチャービジネスの難しさを垣間見ることができましたが、同時にご登壇いただいた企業の皆さまの笑顔が印象的でした。

最後になりますが、本研究会の開催に際しては、講演会・懇親会の会場設営・準備など、石井支部長をはじめ、東日本支部の皆様が大変お世話になりましたことをここに報告させていただきます。